第1回　ねこと友だち

P2

①イ　②エ　③ア　④ウ　⑤オ

P3

1 (1) じかく　(2) くろう　(3) かがみ　(4) みらい
(5) 灯台　(6) 協力　(7) 便利　(8) 海水浴

2 〈象形文字〉火・犬　〈指事文字〉中・二
〈会意文字〉休・岩　〈形声文字〉持・想

3 〈へん〉秒・坂　〈つくり〉顔・新　〈かまえ〉開・園
〈かんむり〉写・宿　〈あし〉感・然　〈たれ〉病・庫
〈にょう〉遠・起

P4

〔文章たんけん〕

1 問一 (1) タイヤキ・けんか
(2) 右の耳のさきっぽがさけていました
問二 ア　問三 エ　問四 イ
問五 おさかなの夫婦　問六 ウ

解説

問一 (1) 「どうしたの、その耳？」というおさかなの問いに、ねこは何と答えているか。
(2) ――線①に続く部分にけがの様子がくわしく書かれている。
問二 ていねいに説明してあげてもわからないおさかなに、ねこはどんな気持ちになったと考えられるか。
問三 きずがいたくて頭をかかえたのではないことに注意。ここでの「頭をかかえる」は、どうしたらよいかわからないでこまりはてるという意味。
問四 ねこは、今までもアジやイワシがおさかなと同じような形をしていることには気づいていたけれども、それはたまたま同じような形をしているというだけで、食べるために作られたものだと思っていたのである。
問五 登場人物は、ねことおさかなの夫婦とおばさん。このうち、アジやイワシと同じような形をしているのはおさかなの夫婦である。
問六 ねこのけががなかなかおらず、ひどくなっているのを見て、おさかなは心配しているのである。

第2回　キツネとタヌキの大研究

P6

〈たかし〉望遠鏡　〈かおり〉海外　〈けんた〉泳げる

P7

1 (1) けってん　(2) とっきゅう　(3) しかい
(4) よやく　(5) 必要　(6) 方法　(7) 連休
(8) 梅

2 (1) ア　(2) イ　(3) イ　(4) イ　(5) ア　(6) ア
(7) ア　(8) イ　(9) イ　(10) イ

3 (1) 3　(2) 6　(3) 5　(4) 3　(5) 2　(6) 5
(1) 4　(2) 14　(3) 9　(4) 7　(5) 5　(6) 8
(7) 16　(8) 7　(9) 10

解説

(2) 「緑」の「氷」の部分は五画で書く。

P8

〔文章たんけん〕

1 問一 目・ちえ
問二 まちぶせ・もどってくる
問三 イ　問四 ウ　問五 ヨーロッパの人たち
問六 これらのと

解説

問一 キツネのどのような点が狩りの能力の高さにつながっているのかをとらえる。7行目に「耳もよく」、10行目に「目もいい」、11行目に「ちえのはたらきも、なみたいていではないんだ」とある。
問二 すぐあとの部分で説明されている。
問三 □の前の文もあとの文も、キツネがちえのある動物であることを説明しているので、つけ加えるはたらきのつなぎことばを選ぶ。
問四 『イソップ童話集』に登場するキツネについては、47～48行目に「ほかの動物をだまして、たべものを手にいれたり、いじわるをしてほくそえんだりする〝悪役〟」とある。この部分の説明と合うものをア～エの中から選ぶ。
問五 30行目から始まる段落に、「ヨーロッパの人たち」がむかしからキツネを「悪ぢえの発達した、ずるがしこい動物」と考えてきたことが書かれている。この考え方や見方が「古代の中国の人たち」と共通している。
問六 30行目から始まる段落に「これらのとびぬけた能力を観察して……レッテルをはってきた」とあるのに着目する。この段落より前の部分でキツネの狩りの能力について、あとの部分で人がキツネをどのような動物だと考えてきたかが書かれている。

第3回　ひあたり山とひつじのヒロシ

P 10

① 合　② 通　③ 図　④ 運　⑤ 開　⑥ 身

P 11

1
(1) しんよう　(2) こうがい　(3) かんさつ
(4) ぎょせん　(5) 愛　(6) 健康　(7) 老人
(8) 関

2
(1) イ→ア→ウ　(2) ア→ウ→イ　(3) ウ→イ→ア
(4) ア→イ→ウ　(5) イ→ア→ウ　(6) イ→ウ→ア

3
(部首・画数の順に)
(1) リ・4　(2) 广・7　(3) 糸・8
(4) 走・3　(5) 頁・9

P 12

〔文章たんけん〕

1
問一　ひあたり山・くすのき・一メートル
問二　A ウ　B イ
問三　(1) おじいちゃんの介護にいったから。
　　(2) かえりがおそくなるから。
問四　食器棚のひきだし
問五　イ　問六　ウ
問七　夕日の中（〜）ようだ。

解説

問一　すぐ前の段落に、「円盤みたいに」ということばがあることに注目する。何のことを「円盤みたい」と言っているのかをとらえる。
問二　Aは、小さなボールをにぎる様子があてはまる。Bは、かけだす様子があてはまる。
問三　かあさんが書いた走り書きの中から読み取る。かあさんについては「おじいちゃんがまた入院、大いそぎでかあさんは出かけます」という部分から、とうさんについては「とうさんに早くかえって、とたのみましたが、今夜もおそいそうです」という部分からわかる。
問四　このあとりょう太は食器棚のひきだしから千円札を出している。
問五　運命とは、もともとそうなるように決まっていること。
問六　りょう太が学校に着いてから、フェンスごしにひあたり山とくすのきを見ていることからはんだんする。
問七　りょう太は「がっかりなんて、していない！」といっているが、わざわざそんなことを「大きな声でいってみる」のは、本当はがっかりしているからである。そんな気持ちがひあたり山やくすのきの様子と重なっている。

第4回　レモン／じっと見ていると

P 14

① 角　② 去　③ 合　④ 式　⑤ 所　⑥ 由
⑦ 度

P 15

1
(1) たんちょう　(2) しつれい　(3) ひこうじょう
(4) せつめいぶん　(5) 成果　(6) 照　(7) 出席
(8) 案内

P 16

〔文章たんけん〕

1
問一　エ
問二　レモンは
　　遠くへ　行きたいのです
問三　ア　問四　ア・イ　問五　ウ

解説

問一　「車輪」とは、うすく輪切りにされたレモンをたとえている。
問二　「それ」は第一連の内容を指している。
問三　「車輪　車輪　車輪」と音読してみるとよい。
問四　うすく切ったレモンを車輪にたとえている。また、第五連は第一連をくり返している。
問五　「いい香りをふりまいて」とあるのに着目する。「力強さ」「はかなさ」「なつかしさ」は感じ取れない。

2
問一　いなか
問二　なくさずに　だいじに　使ってね
問三　(1) エ　(2) イ　問四　ウ

解説

問一　雲が「いなかのおばあちゃんが／ほしがきをたくさん作っていますよ」といったことから、雲はいなかでおばあちゃんの様子を見たあとに、流れてきたと考えられる。
問二　同じ連の「なくさずに　だいじに　使ってね」が、消しごむが作者に言ったように聞こえたことばである。
問三　(1) 作者がイチョウの葉に見とれている場面であることをとらえる。
問四　作者がじっと見てことばを聞き取った対象が、「雲」「消しごむ」「イチョウの葉」といった身近なものであることに注意する。

第5回　夏子先生とゴイサギ・ボーイズ

P 18

① 寒い　② 勝つ　③ 広い　④ 午前　⑤ 聞く

P 19

1
(1) ほっきょく　(2) はいぼく　(3) かだい
(4) きかい　(5) 希望　(6) 記念　(7) 氏名　(8) 児童

2
(1) イ　(2) ウ　(3) ア　(4) エ

3
(1) 〈主語〉風が　〈述語〉ふく　〈修飾語〉そよそよと
(2) 〈主語〉ねこが　〈述語〉いる　〈修飾語〉屋根に
(3) 〈主語〉教室は　〈述語〉静かだ　〈修飾語〉とても
(4) 〈主語〉お金が　〈述語〉足りない　〈修飾語〉少し

P 20

〔文章たんけん〕

1
問一　エ
問二　びり・優勝
問三　つぶれたカエル
問四　ウ　問五　イ

解説

問一　「ぽっかり」は、あななどが大きくあく様子を表す。ここでは、プールのとびこみ台に、九人の選手がずらりとならび、五年三組の第八コースだけがあいている様子を表している。

問二　かなづちであるのに、五十メートル男子自由形に出ることにした正広（まさひろ）の気持ちをとらえる。「出さえすれば、びりでも……同点優勝（ゆうしょう）だぞ」という学級委員やゴイサギ・ボーイズのことばを聞いて、五年三組の優勝のために出ようと考えたのである。

問三　あとのほかの組の子どもたちがはやしたてていることばに注目する。

問四　「夏子先生は、気が気でない」とある。「気が気でない」とは、「ひどく心配で落ち着かない」という意味。

問五　「広いプールを、たった一人。正広は、いきをきらし、しずみそうになりながら、やすみ、やすみ、泳いでいく」という正広の様子から考える。

ことば遊び

P 22

1
① ぼく、はいしゃに行く。（ぼく、歯医者に行く。）
ぼくは、いしゃに行く。（ぼくは、医者に行く。）
② 夏休みの宿題、はやめにする。（夏休みの宿題、早めにする。）
夏休みの宿題は、やめにする。
③ ここで、はきものをぬいでください。
ここでは、きものをぬいでください。
（ここでは、着物をぬいでください。）
④ 背の高い、少年と少女が来た。
背の高い少年と、少女が来た。

P 23

2
① 春雨　② 夕立　③ 時雨　④ 梅雨
⑤ 木がらし　⑥ そよ風　⑦ つむじ風　⑧ あらし